

空海と東国仏教

— 『高野雜筆集』所収の密教經典書写依頼に関する書簡の検討から—

小笠原 弘道

はじめに

弘法大師空海（以下空海と略称）の事蹟について歴史的考証を行う場合、その基本となる史料としてまず上げられるのが、おもに空海の遺文を集めた『遍照發揮性靈集』と『高野雜筆集』であろう。本稿の主たる目的は、この『高野雜筆集』に収められた書簡類を分析、検討することにより空海の事蹟の一齣を明らかにしようとするものである。

さて、『高野雜筆集』には、現在の東北地方や関東地方の人々に対する多くの「密教を広めるために經典の書写を願う」などといったいわゆる密教經典書写に関する書簡が収められている（さらに、九州の知人に対しても密教經典書写に関する書簡を発している）が、空海は、どのような意図により密教經典書写を行おうとしたのだろうか。そして、どうして東国のような遠方の人々に依頼したのだろうか。

ここでは、これら東国に宛てた一連の「密教經典書写依頼」の書簡、さらには九州の知人に宛てた書簡を取り

上げ、その内容などを検討し、東国に宛てた書簡と九州の知人に差し出したものの関連性を探り、空海の東国への「密教經典書写依頼」が、いつ、どのような目的で行われたのかについて考証してみたいと思う。その上で、密教經典書写を依頼が、なぜ東国の人々に対し行われたのかについて、当時の東国仏教界の様子を概観しつつ、考えてみたい。

(一) 東国への密教經典書写依頼

「はじめに」でも述べたとおり、『高野雜筆集』には、東国（現在の東北地方や関東地方）の人々に対し、密教經典の書写を依頼したと思われる書簡が断簡も含め全部で九通存在する（ただし、これらの書簡はすべて年次を欠いている）。このうち、ほぼ完全な形で収められているのは、陸州（陸奥国）の徳一菩薩（このころ、現在の福島県会津地方を中心に活動）に宛てた書簡と下野国（現在の栃木県）の広智禪師に宛てた二通である。

まず、徳一宛の書簡は、

摩騰不遊振旦久聾。康会不至呉人長誓。聞道德一菩薩。戒珠水玉智海泓澄。斗藪離京振錫東往。始建法幢開示衆生之耳目。大吹法螺發揮萬類之仏種。咨伽梵慈月水在影現。薩埵同事何趣不到。珍重珍重。空海入大唐所學習秘藏法門。其本未多不能広流伝。思欲乘衆縁力書写弘揚。所以差弟子康守馳向彼境。伏乞顧彼弘道助遂少願。幸甚幸甚。委曲載別。嗟雲樹長遠誰堪企望。時因風雲恵及金玉謹奉狀不宣。沙門空海狀上

四月五日

陸州徳一菩薩法前謹空

名香一裹。物軽誠重。檢至為幸重空

と、記されている。

すなわち、「摩騰がもしインドから中国に仏教を伝えなかつたならば、人々は久しくその教えを耳にすることはできなかつたでしょう。また、康僧会が呉の国に行かなかつたならば、やはりその人々は長く仏法に触れることはなかつたかもしれません。伝え聞くところによりますと、徳一菩薩、あなたは氷の玉のように清浄にして持戒堅固、しかも、広く深い海のような智慧をお持ちのことと承知しております。菩薩は世間の塵垢を避けひたすら行を修するため都を離れ、仏法興隆のため遠く東国に向かわれました。そして、かの地においてはじめて仏法の幡をたなびかせ、高らかに仏の教えを説き示し、多くの人々の仏の心を萌芽させました。ああ、慈悲深い仏の教えは、水さえあればどこでもその影を映す月のように、あなたの教化の実践は人々に浸透し、必ずやその実りをもたらすことでしょう。まことに喜ばしい限りです。さて、私、空海は唐において密教を修得し、その經典を請来しましたが、部数が少なく、なかなかその教えを広めることが叶いません。そこで、縁の深い方々のご援助をいただき、經典の書写をお願いし、ぜひとも密教を弘揚したいと願っております。そのために弟子の康守をそちらの地に馳せ向かわせました。なにとぞ仏教興隆のためにご援助いただき、私のささやかな願いを叶えていただければ幸せの至りです。詳細は別に記しておきました。ああ、あなたとは遠く隔たり、雲と樹のような密な交流をすることができません。が、それを望まぬ者はだれ一人としていないでしょう。時にはお便りを頂戴できますことを切に望みます」といったことが述べられている。

つぎに、広智禪師に宛てた書簡⁽²⁾であるが、

幽蘭無心而氣遠。美玉深居以價貴。闍梨僻處遐方善稱與風雲而周普。甚善甚善。貧道遊大唐所習得真言秘藏。

縁其本未多久滞講伝。今思乘衆機之縁力書写神通之宝藏。所以差弟子僧康守発向彼境。冀乘彼金剛薩埵之悲願。扣勸待雨之種子。今因康守金剛子不宣。釈空海白

三月二十六日

下野広智禪師侍童

と書かれている。その内容は、「幽谷に自生する蘭の花は、自分を誇示するような心などなくただただひっそりと咲いています。その香気は遙か遠くにまで及ぶことでしょう。また、美しい寶石は、たとえ地中深くに埋もれていても、その価値は何らかわることなく高貴なままです。広智阿闍梨、あなたは、たとえ遠く離れた地に居られようと、（幽蘭や美玉のたとえと同様に）その名声は人々の伝えるところにより普く知れわたっております。まことに喜ばしい限りです。」と述べた後に、やはり、「私空海は大唐に遊学し真言密教を習得して参りました。しかし、經典の部数が少なく人々に講伝することが長らく滞っております。そこで、有縁の方々のお力添いにより密教經典の書写をお願いしたい。そこで弟子の康守をそちらに使わし云々・・・」となっている。

これらと比較すると、若干の表現の違いはあるものの、いずれの書簡も「唐より請来した密教は、その經典の部数が少なく思うように密教を広めることができている。そこで有縁の人々の援助により密教經典の書写をお願いし、ぜひともその布教に努めたい。」といったことが述べられていることがわかる。

【表】

番号	宛所(人物)	時期(月日)	使者	面識、交流の有無
2	陸奥国徳一菩薩	四月五日	康守	なし(・聞道、徳一菩薩・ ・雲樹長遠 誰堪企望)
3	下野国広智禪師	三月二十六日	康守	なし(關梨、僻處還方善称與風 雲而周普)
4	某阿闍梨	不明	康守	なし(古人不貴面談。所貴者在 回道而已。余久聞闍梨服 勤精進……)
5	萬徳菩薩	不明	不明	なし(如問。萬徳菩薩垂迹東方 學法化生……)
6	某人	暮春(三月)	不明	なし(年雖不相調。久承籍甚。 夫見其人忉忉我心)
7	某人	暮春(三月)	安行	不明(判断する記載無し)
8	甲斐国守 藤原真川	季春(三月)	安行	交流あり (久不承音礼馳仰惟積)
9	常陸国守 藤原福当麻呂	暮春(三月)	不明	交流あり(自春說清頭。每思高風 日夕服之。豈捨字于心。)
10	某人(僧侶カ)	暮春(三月)	不明	交流あり (雲霞渺然音札久寂)
24	鎮西府某人 (入京中)	不明	不明	交流あり (悵然不已)
34	鎮西府某人	仲秋(八月)	不明	交流あり (在鎮西府之日敢取以于 折紙筆等。便垂恩許詒。)

※「番号」は、「高野雜筆集」(弘法大師全集)第三種所収の掲載順を示す。

そこで、さらに九通の書簡を整理してみると、【表】のようになる。これを見ると、まず、書簡を差し出した季節は、暮春から初夏（ほとんどが三、四月）。発信先の多くは、先にも示したとおり、東国（現在の東北及び関東地方）の人々。とくに僧侶が多く、国司など僧侶以外に対する書簡も幾通か存在する。また、弟子の安行と康守を使者として向わせているということが理解できるのである。

つまり、九通の書簡はいずれも文意（依頼内容）、発信先（東国方面）及び時期（暮春、初夏）、そして使者（康守、安行）など共通する部分が多いことから、すべて同時期に同じ意図の下に発せられたものと見ることができであろう。

では、これらの書簡はいづごろ（年次）発せられたと考えられるだろうか。

そこで想起されるのが、弘仁六年（八一五）四月一日の日付を有する「諸の有縁の衆を勧めて秘密藏の法を写し奉るべき文（原漢文）」（以下「勸縁疏」と記す）である。

すなわち、この「勸縁疏」の後半部分において、

貧道遠遊大唐求訪深法。幸得遇故大広智三藏付法弟子青龍寺法諱惠果阿闍梨。受学此秘密神通最上金剛乘教。（中略）貧道謹承教命。服勤学習以誓弘揚。貧道婦朝雖歷多年。時機未感不能広流布。水月易別幻電難駐。元誓弘伝何敢輒黙。今欲為機縁衆。説講宣揚奉報仏恩。然猶其本不多法流壅滯。是以差弟子僧康守安行等發赴彼方。若有神通乘機。善男善女若縑若素。與我同志者結縁此法門書写説誦。如説修行如理思惟。則不經三僧祇。父母所生身超越十地位。（中略）今不任弘法利人之至願。敢憑煩有縁衆力。不宜謹疏。弘仁六年四月二日。沙門空海疏

とし、はじめ、「密教を弘揚する決意は、唐で惠果阿闍梨より密教を伝授されたときである。」と述べ、帰国後、

なかなかその機会を得られなかったが、「今こそ密教を人々に伝える絶好の時機であり、弟子の康守や安行をそちらに使わします」ので、ぜひとも（密教經典の書写に）協力していただきたい、との旨が記されており、まさに一連の密教經典書写依頼の書状の文意と一致しているのである。これについて、高木誦元氏⁽⁴⁾は「密典流布の趣旨書ともいべきもの」と指摘し、この「勸縁疏」に添えて使者に持たせた私信が一連の書状であらう、と推察されている。

これらのことから考ええると、一連の東国への密教經典書写依頼は、「勸縁疏」が書かれた弘仁六年（八一五）の春から夏にかけて実施されたものと見るができるだろう。

（二）密教經典書写依頼までの軌跡

ところで、先にも示したように、「高野雜筆集」には、空海が九州の知人に対し、やはり「密教經典書写」について述べている書簡が二通収められている。【表】の24号と34号がそれである。ここでは、これら二通の書簡の内容を検討し、東国に宛てられた書簡との関係を見ていくことにより、さらに東国への密教經典書写依頼の実態に迫ってみたい。

まず、その内の一通は、「西府に一たび別れて今に七年」と冒頭で述べ、鎮西府の某人に宛てたとされる書簡⁽⁵⁾（便宜上、以後、この書簡を「西府」と記す）で、宛名、年次等を欠いているものである。すなわち、

西府一別七年於今矣。悵戀不已。忽見有人伝語。比日入京。即欲就謁。私願有期不出山局。限以此縁不遂馳謁。貧道聊欲供三寶山厨闌然每事難弁。伏乞垂濟米油等。又從大唐所將來經疏文書等。思欲写取數本普事流

伝。紙筆等亦難得。亦望垂恵

というもので、その内容は、「鎮西府を離れたのは今から七年前のことですが、あなたを忘れることはありません。突然、人から聞いたのですが、あなたは近ごろ都に來られているとのこと。すぐにでも参上し、お目にかかりたいのですが、今、期限をきって修法を行っているため山門を出ることが叶わず、お会いすることができません。私は、今、いささか三宝を供養しようと思つていますが、山寺の厨房には、物資が乏しく、このたびに準備するのが困難な状況です。どうか米や油を施与し、援助して下さいようお願いいたします。また、唐から持ち帰つた経論などのうち、いくらかを書写しあまねく密教を流伝させたいと思つています。そのための紙や筆が得難く不足しています。これらについてもお恵みいただければ幸いです。」というものである。

そして、もう一通は、「仲秋すでに涼し」という書き出しの筑紫の某人に宛てたもの（以下、この書状を「仲秋」と記す）で、この書簡も宛名、年月日を欠いている（しかし、「仲秋すでに・・・」という書き出しから八月ごろの書簡と考えられる）。

仲秋已涼。伏惟動止萬福。某甲從大唐所將來經論等其數稍多。思願写取數本普事流傳。是故在鎮西府之日敢以于折紙筆等。便垂恩許訖。雖然未蒙顧恵慊極深。恐大人多故忘却小事。所以重煩視聽。謹奉狀不宣。謹狀

これによれば、「秋も仲ばとなり涼しくなりましたが、ご機嫌いかがでしょうか。私、空海は、唐から経論を持ち帰りましたが、その内いくつかを書写してあまねく密教を流伝させたいと思つています。そのため、かつて鎮西府におりました時、紙や筆などの恵施をお願いいたしました。そしてその時、そのお願いを聞き入れていただきました。しかしながらその恵みを頂戴しておりません。恐らくあなたはお忙しくて私の小さなお願いなど忘れて

しまったのかも知れません。それゆえ重ねてご配慮いただきたくお願いいたします。」という内容になっている。さて、この二通の書簡をみると、宛所（二通とも九州に滞在していたときからの知人に対してであるが、文意から推察すると「西府」は滞在中の京都、「仲秋」は九州（鎮西府）に宛てていると思われる）は違うものの、①密教を広めるため、請来した経論を書写しようと思っていること。②物資の不足から紙や筆など（「西府」ではさらに米や油も）の施与を願っている。などの点で内容が一致しており、ほぼ同じ時期に発せられたものと見るができるだろう。

ところで、高木氏⁽⁷⁾は、九州の知人へ宛てたこれらの書簡について、一連の東国方面への書簡とその内容（密教の弘宣のため、請来した経論の書写を行う、という記述のことか）が一致しているとし、「弘仁六年には単に東方の諸国のみならず、秋には、筑紫など、西国地方にも密典書写の「勸縁疏」を送り、その援助を求めていることがわかる。」と、述べられている。が、そのように考えてよいのだろうか。⁽⁸⁾

そこで、東国の徳一及び広智に宛てたものと九州の知人に宛てられた書簡の文面をもう一度確認し、依頼内容を具体的に比較してみよう。

まず、徳一や広智など東国方面に宛てられた書簡では、「空海、大唐に入り学習するところの秘蔵の法門、其の本末だ多からずして広く流伝するところ能わず。衆縁の力に乗じて書写し、弘揚せんと思欲う。（中略）伏して乞う。かの弘道を顧みて、助けて少願を遂げしめなば、幸甚、幸甚。」（徳一宛）とか「貧道、大唐に遊んで習得するところの真言秘蔵、其の本、未だ多からざるによつて、久しく講伝滞る。今思わく。衆機の縁力に乗じて神通の宝蔵を書写せんことを。」（広智宛）などと述べ、その文意は、「いまだに密教があまり弘まっておらず流伝が滞っているため、經典の書写を願う。」という内容になっている。

これに對し、九州の知人に宛てたものは、「大唐より將來するところの經疏文書等、數本を寫し取りて普く流轉を事せんと思欲う。紙筆等もまた得難し。また恵みを垂れんことを望む。」(西府)や「某甲、大唐より將來するところの經論等、その數稍多し。數本を寫し取りて普く流轉を事とせんと思願う。」(仲秋)と、ともに、密教の流傳が滞っているなどの表現がなく、「經典書寫をしたい」との表現のみで、「書寫を願う」といった文面は見あたらない。つまり、經典を書寫するための紙や筆および米や油などの物資の施与を願っているもので、經典書寫の依頼は行われていないのである。

さらに、「勸緣疏」からもわかるように、空海の密教宣布の發願は惠果より密教を伝授された時点であり、帰国してまもなく(九州滞在中に)そのための準備を行っていたようである(「仲秋」でも「鎮西府にいたころから密教經典を書寫しようと思ひ、紙や筆の援助をあなたにお願いしたのに・・・」と述べられていることから、九州滞在中から書寫のための紙や筆の助成を願っていたと考えられる)、そのことを考え合わせると、九州の知人に宛てた書簡は、必ずしも弘仁六年(八一五)に發せられたものと言ひ切ることはできないのではなからうか。

そうであれば、九州の知人に宛てた書簡は、いづごろ差し出されたと考えればよいのだろうか。ここでは、空海が帰国してから弘仁六年に至るまでの事蹟を概略的に追ひながら、検討してみたい。

承知の通り、空海は帰国後まもない大同元年(八〇六)十月、唐より持ち帰った經典、法具、曼荼羅などを記した『御請來目錄』を朝廷に提出しているが、このころ朝廷は、すでに最澄がもたらした密教に強い関心を示し、最澄こそが日本における密教の第一人者である、と考えていた。そのため、空海が提出した『御請來目錄』にはあまり注目していなかったようで、すぐには受け入れてもらえず、しばらく入京も叶わなかった。しかし、平城天皇に替わり、嵯峨天皇が即位すると、大同四年(八〇九)七月、ようやく入京が認められた。

入京すると、空海はすぐに勅を受け、『世説』を屏風二帖に書して献上したのをはじめに、弘仁二年（八一二）には『劉希夷集』四巻を書写したものを、さらに同三年（八一三）には『急就章』『王昌齡集』等十巻を進献するなど、その後も勅を受け、古人の真筆、詩書などを献上しているのである。⁽¹¹⁾つまり、このころの空海は、正統な密教の相承者としての立場ではなく、書や詩文の優れた才能を持ち得た文化人として評価され、嵯峨天皇の厚遇を受けるのである。⁽¹³⁾

ところで、空海が請求した密教の真価にいち早く気づいたのは最澄であった。最澄は、空海が朝廷に提出した『御请来目録』を披見し、自ら請求したものとはかなり違うものであることに驚嘆し、空海が入京を認められるとすぐに弟子を遣わし、密教經典の借用を始める。⁽¹⁴⁾そして、弘仁三年（八一三）末から翌四年（八一四）にかけ、空海は、最澄の要請もあつて高雄山寺において両部の結縁灌頂を修したのである。⁽¹⁵⁾このとき最澄は自らも積極的に受法し、空海がもたらした密教の撰取に勤めたといわれている。つまり、この時点で最澄は正式に空海の弟子となったのであり、この灌頂は、密教の法匠としての空海を世に知らしめることとなったといえるだろう（これにより、ようやく密教者としての空海が存在が認知されることとなる）。

以上、空海の帰朝から密教經典書写依頼の行われた弘仁六年ごろまでの事蹟をおおまかに見てきたが、これを踏まえ、密教經典書写依頼に至る経緯を類推すると次のようなことがいえるだろう。すなわち、空海は唐で恵果より密教を伝授されたときから密教宣布を目論んでいた。そして、帰国（九州上陸）するとそれを実行すべく紙や筆の施与を地元の人に懇願しているのである。しかし、帰国してしばらく、空海がもたらした密教は朝廷に受け入れてもらえず、入京もできなかった。それゆえ宣布運動が実行に移せなかった。が、弘仁年間になると、ようやく密教者としての空海が存在が認められるようになり、經典書写の準備も整い、弘仁六年（八一五）、満

を持して密教宣布の一大キャンペーンを展開するに至り、東国方面の僧侶や国司に対し密教經典の書写勸進を行ったのである。⁽¹⁶⁾

このように見ると、九州の知人への書簡は、東国への密教宣布運動の準備段階でのものと考えることができ、少なくとも弘仁六年以前に発せられたものであらうと推察するのである。⁽¹⁷⁾

(三) 東国における道忠グループの実態

ところで、ここで注目したいのは、たとえば、徳一宛の書簡で「聞くならく、徳一菩薩は戒珠水玉のごとく智海泓澄たり」と述べ、広智宛の書簡でも「闍梨、遐方に僻処すれども善称風雲と與んの周普す」としているように、この時点では、あきらかに、空海は両者と面識はもちろん、書簡のやり取りすらなかったということである。にもかかわらず、「有縁」などと称して徳一や広智などに經典の書写依頼を行ったのはどのような理由からだったのだろうか。つまり、なぜ、面識も書簡のやり取りもない、東国の僧侶らにあえて經典の書写依頼を行ったのだろうかということである。

そこで、ここでは、弘仁六年(八一五)に書写された京都高山寺藏『金剛頂一切如来真实撰大乘現証大教王經』(以下、『金剛頂經』と略記)三卷の奥書を手がかりに、その成立背景を見、さらには、当時の東国仏教界の様子を探りつつ、この問題について考えてみたい。

さて、この『金剛頂經』の奥書には、

上野国 縁野郡 淨院寺

一切経本

掌経仏子教興

掌経仏子

写経主仏子教興

経師近事法慧

弘仁六年

歲次乙未六月十八日
即是平城宮御宇
神野天皇之世也

奉為 皇帝皇妃太子諸皇左右大臣拱基無動
六親七世捨德有餘近露自身遠洽他界

一切行者法眼

無上菩提正因

とある。

すなわち、この『金剛頂経』三巻は、弘仁六年（八一五）六月十八日、上野国（現在の群馬県）緑野郡の浄院寺において、写経主の教興が、法慧の援助を受けながら書写されたものである、ということがわかる。さらに、この『金剛頂経』巻一の表紙見返しには、⁽²⁰⁾

秘密経王三十六卷弘仁六年五月依

海阿闍梨之勸進上毛沙門教興書進

右十無尽院藏中相辛櫃之銘三十六卷之内

金剛頂経三巻現存云々

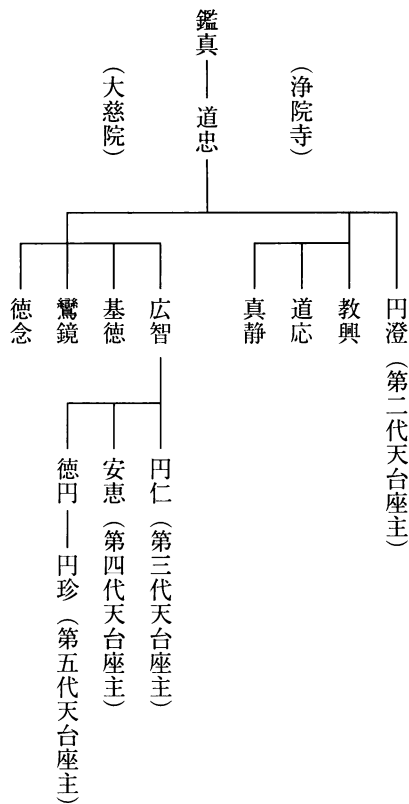
天保元年七月奉修補之 高山寺沙門慧友護謹記

と、天保元年（一八三〇）高山寺慧友が、この『金剛頂経』を補修した旨を記した墨書がある。これによれば、弘仁六年（八一五）五月、空海の勸進により、この『金剛頂経』を含む密教経典三十六巻の書写を行った旨を教興が記している、というのである。

この墨書については、武内孝善氏と赤尾栄慶氏⁽²¹⁾が別の視点からではあるが、それぞれ綿密な検証を行いその信憑性の高さを実証されており、これらの研究成果から、高山寺に現存するこの『金剛頂経』三巻は、弘仁六年春～夏、空海による一連の東国への密教経典書写依頼を受け浄院寺の教興が書写したものと考える。

さて、この浄院寺は、鑑真の弟子の道忠（生没不詳）が開いた寺院で、教興は道忠の高弟であった。『叡山大師伝』⁽²³⁾によれば、もともと道忠には、「ここに上野国浄土院の一乘仏子教興、道応、真静、下野国大慈院の一乘仏子広智、基徳、鸞鏡、徳念等あり。本是れ故道忠禪師の弟子なり」というように、七人の弟子が存在していたようである。が、ここで注目されるのが、下野国広智も道忠の弟子であったということである。つまり、広智と教興はともに道忠の法弟というきわめて緊密な関係にあったということである。しかも、この道忠を師とする弟子たちは、下野国から上野国、さらには武蔵国を中心に宗教活動を展開し、一つの大きな同法グループを形成していた（便宜上、以後道忠グループと称す）と考えられているのである（**【図】**参照）⁽²⁴⁾。

【図】道忠グループ系図



では、この道忠グループとはどのような特徴を持つ集団だったのだろうか。ここでは、いくつかの事例を上げながらその実態について考えてみたい。

まず、第一に、たとえば、道忠について、『叡山大師伝』⁽²⁵⁾は、「有東国化主道忠禪師者。是此大唐鑑真和上。持戒第一弟子也」とし、『元亨釈書』⁽²⁶⁾では、「昔為東州導師。好行利濟。民俗呼菩薩」と述べ、また、広智についても「同郡大慈寺僧広智徳行兼優。俗号広智菩薩者也」と記されているように、道忠や広智は、道俗から「化主」、あるいは「菩薩」と称され、民衆の教化、救済にあたっていたというのである。この「化主」について吉田靖雄氏⁽²⁸⁾は、「化他行利他行の実践」者で、「彼等の活動した範囲は、すくなくとも郡規模から数カ国にわたっていた。こ

の利他行の実践ということと活動の広範囲であったことの二点は、菩薩と称された僧の行動面と一致しており、「化主」と「菩薩」とは、同じ内容をもった異称であることだけわかるのである。」とし、道忠、広智の師弟は「民衆に対する菩薩利他行の実践という点で一貫して連なっているのである。」と述べられている。つまり、この指摘をふまえれば、(道忠や広智に代表されるように)この集団そのものが民衆に対し積極的に菩薩行を實踐していた組織だったのではないかと思うのである。⁽²⁹⁾

第二に上げられるのは、延暦十六年(七九七)、最澄が比叡山上に一切経を備えるため經典書写の発願をしたとき、道忠は二千余巻の経論を書写し、これを助成しているが、それ以降、道忠教団、とくに緑野寺⁽³⁰⁾浄院寺ではさかんに書写事業が行われていたということである。たとえば、時代は下がるが、『統日本後紀』卷三の承和元年(八三四)五月十五日条に、⁽³¹⁾

勅。令相模。上総。下総。常陸。上野。下野等国司。勦力写取一切経一部。来年九月以前奉進。其経本在上野国緑野郡緑野寺。

とある。これによれば、承和元年(八三四)、上野国緑野寺(浄院寺)に備えられている一切経を底本として、相模・上総・下総・常陸・上野・下野の国司に対し、一切経の書写を命じる勅が出されているのである(ちなみに、承和六年(八三九)には、ここに上げた六カ国に武蔵国を加えた七カ国の国司に対し、また、仁寿三年(八五三)には、陸奥国を含む東国諸国の国司に対し一切経の書写を命じる勅が出されている)⁽³²⁾。このことから、浄院寺では、かなりの部数の一切経を完備し(このことは朝廷をはじめ全国規模で知るところであったと思われる)、⁽³⁴⁾ いわば、東国における写経センターのような機能を持ち得ていたということが窺い知れるであろう。

さらに、【図】を見ると、円澄(第二代天台座主)をはじめ、円仁(第三代)、安恵(第四代)など立て続けに

天台座主を出していることから理解できるように、この道忠グループは最澄及び天台教団ときわめて密接な関係にあったということである。天台教団との関わりは、先述した延暦十六年（七九七）の最澄発願の一切経の書写を道忠が援助したことに始まる。その後、たとえば、円澄（十八才の時、道忠に師事）は、延暦十七年（七九八）、道忠とともに一切経の写経を持って叡山に登り、そのまま最澄の弟子となる。また、延暦十九年（八〇〇）安恵は七歳で広智の弟子となり、同二十一年（八〇二）には、九歳の円仁が広智に入門するが、広智は、大同元年（八〇六）に安恵を伴い、同三年（八〇八）には、円仁を連れ叡山に登り、それぞれを最澄の弟子としていたのである。このように見てくると、両者の緊密な関係を築く過程での広智の存在はきわめて重要であったといえるだろう。

（四）東国における密教經典書写依頼の目的

以上見てきたことから、道忠グループの特徴については、

- ① 民衆の教化、救済を旨とする菩薩行を実践する組織で、その活動範囲は、下野・上野・武蔵の広範囲に及んだ。
- ② とくに、浄院寺（緑野寺）では写経活動が盛んで、国家的写経事業にも対応できる一切経を備え、いわば、写経センター的な機能を有していた。

③ 天台教団とのつながりが強く、第二代以降、歴代座主を立て続けに出している。
の三点が上げられる。

さて、ここで想定されるのは、（先述の通り、これまで書簡のやりとりすらなかった徳一や広智に対し、經典

書写の依頼を行っているわけであるが、空海は道忠グループの広智などとそれまで個人的な交流はほとんどなかったにせよ、道忠グループの様子や東国の社会状況などについてはある程度知り得ていて、あえて密教経典書写依頼を行ったのではなからうかということである。

それは、たとえば、東国への書簡の中〔表〕参照〕に甲斐国司藤原真川と常陸国司藤原福当麻呂に宛てたものが存在するが、これらの書面を見る限りでは、両者とも空海と親交があったようである。これら当地に赴任している知人などから現地の最新情報を得ることは可能だったと思われるからである。

つまり、空海は、現地の知人からの情報により、道忠グループが、東国の広範囲にわたる菩薩行による民衆への教化を實踐し、組織的に写経活動を行っていることを知り、その宗教活動に大いに期待をよせ密教経典書写を依頼したのではないかと考える。

ところで、道忠グループ側はこの密教経典書写依頼をどのように受け止めたのであろうか。

たとえば、広智は、大同五年（八一〇）五月に叡山止観院において最澄より三部三昧耶の印信を授けられ、円澄（この時は天台教団の一員としてではあるが）も、弘仁三年（八一二）先の高雄山寺での結縁灌頂を受けている。これらのことから考えると、道忠グループの僧たちは、最澄をはじめ広智、円澄などから密教経典を披覽する機会は多分にあっただろうし、ある程度密教の知識をある程度有するものも存在していたのではと予想される。しかし、先に出げた赤尾氏は、教興の書写した『金剛頂経』を書誌学的に分析し、「また本巻の本文に関して付け加えれば、梵語ヴァジュラ⁽³⁶⁾vara（金剛と訳す）の音写語である「嚩日囉」が「嚩日囉」とあるべき三文字をほとんど「嚩囉」と二文字のように書写しており、当時この用語が書写した教興に正しく理解されていたかは疑わしい。」と述べ、教興がそれまで密教経典を目にすることはなく、密教の知識があまりなかったことを指摘

している。そして、「浄院寺一切経中の経巻であった本巻は、三十帖冊子もしくは空海請来の経典に非常に近い写経をテキストとして書写されたことは間違いなからう。」と述べられている。つまり、写経のために一切経を保有していた浄院寺においても、空海の書写依頼によりもたらされるまでは、密教経典は存在しなかったようである。新たな経典を取得することができたことで、空海の勧進はかなり好意的に受け入れたものではなからうか。

おわりに

本稿では、空海の密教経典書写依頼がなぜ東国を中心に展開していたのかについて検討してきた。その中で、この当時、東国では道忠の弟子たちの教団が存在し、菩薩行の実践による民衆教化と写経活動がさかんに行われていたことを明らかにし、空海はこの様子を把握していたため経典書写を依頼したのではないかと、ということも述べてきた。ここでは具体的に考証してこなかったが、徳一についても道忠グループと同様に常陸から陸奥にかけて、同法の集団を擁し、宗教活動を展開していたのではないだろうか。そして、空海はその実態をやはり知り得ていたのではないかと推察する。

註

- (1) 『高野雑筆集』巻上(『弘法大師全集』第三輯 五六五～五六六頁)
 - (2) 『高野雑筆集』巻上(『弘法大師全集』第三輯 五六六頁)
 - (3) 『性霊集』巻九(『弘法大師全集』第三輯 五二六～五二九頁)
 - (4) 『空海と最澄の手紙』二四四～二四五頁
 - (5) 『高野雑筆集』巻上(『弘法大師全集』第三輯 五七九頁)
 - (6) 『高野雑筆集』巻上(『弘法大師全集』第三輯 五八五頁)
 - (7) 前掲『空海と最澄の手紙』七三頁
 - (8) 『高野雑筆集』巻上(『弘法大師全集』第三輯 五八七頁)
- には、九月三日付の「鎮西府安少式」宛の次のような内容

- の書簡が存在する。それは、「弟子真栄帰途の際、書状を寄せられ、合わせて密教經典を写し、託して下さいました。この深い随喜は何ものにも喩えようがありません。．．．」というものである。このことから、空海は、九州に対して、も密教經典書写依頼を行っていたのでは、と推察されるが、これが弘仁六年のものであるかどうかは確証を得ていない。改めて検討したい。
- (9) 大同元年(八〇六)正月、最澄は年分度者二名が許され、天台教団は南部の諸宗と同様、独立した教団として認められた。しかも、年分度者二名のうち、一人は密教修得者である遮那業とされたのである(『類聚三代格』巻二(『新訂増補国史大系』第二五巻 七四〜七五頁))
- (10) 『性靈集』巻四「勅賜世説屏風書畢献表」(『弘法大師全集』第三輯 四三五頁)
- (11) 武内孝善氏「高野山の開創とその意義—弘法大師の生涯における弘仁六・七年—」(『密教文化』一六二号 以下、武内A論文と略記)
- (12) たとえば、弘仁元年(八一〇)十月、空海は請来した密教を知らしめるべく上表し鎮護国家のための手法を願ひ出ている(『性靈集』第四(『弘法大師全集』第三輯 四三五〜四三六頁))が、これが認められ実際に行われたかは疑わしい(川崎庸之「日本仏教の展開」二四五頁)
- (13) 武内A論文
- (14) たとえば、大同四年(八〇九)八月、最澄は弟子経珍を遣わし「大日経略撰念誦随行法」などの借覽を願っている(『平安遺文』古文書編第八 三三二頁)
- (15) 『拾遺雜集』「高雄灌頂記」(『弘法大師全集』第三輯 六二〇〜六二九頁)
- (16) 弘仁七年(八一六)六月十九日付の上表分により修禪の道場を建立するために高野山を請う(『性靈集』第九「於紀伊国伊都郡高野峯被請迄入定処表」(『弘法大師全集』第三輯 五二三〜五二四頁))など、後の空海の活動状況を見ると、弘仁六年の密教經典書写依頼はまさに本格的な密教宣布のはじまりだったといえる。
- (17) たとえば、笹岡弘隆氏(『伝真濟作「空海僧都伝」の検討(1)』(『日本仏教史学』二二号))は、弘仁三年十一月布の最澄が泰範に宛てた書簡を分析し、この当時の空海は米や紙など物資の不足が深刻な状況にあったとし、「西府」のころもこの状況に対応するとして、同年もしくはその前後に宛てられたと考えられるのでは、と述べている。
- (18) 『表』に示しているように、2〜5号の宛人とは、面識、書簡のやり取りともになかったが、8〜10号の宛人とは面識があったようである。
- (19) 『平安遺文』題跋編 八頁、「高山寺経蔵典籍文書目録」第一一二〜一三頁
- (20) 『高山寺経蔵典籍文書目録』第一 一二〜一三頁

- (21) 「弘法大師をめぐる人々(一)―広智―」〔密教文化〕一
三二号 以下、武内B論文と略記
- (22) 「高山寺蔵『金剛頂瑜伽經』(淨院寺一切經)について」
〔学叢(京都国立博物館) 十四号〕
- (23) 「伝教大師全集」第五付録 三〇〜三二頁
- (24) たとえば、田村晃祐氏「道忠とその教団」(二松学舎大学
論集(昭和四一年度))、能倉浩靖氏「八〜九世紀におけ
る東国小宇宙の宗教と思想」(『産業研究(高崎経済大学附
属産業研究所)』二七卷二号)。
- (25) 「伝教大師全集」第五付録 七頁
- (26) 「元亨釈書」第十三(『新訂増補国史大系』第三二卷 一九
六頁)
- (27) 「元亨釈書」第三(『新訂増補国史大系』第三二卷 六〇頁)
- (28) 「八世紀の菩薩僧と化主僧について」(論集奈良仏教 第
二卷 律令国家と仏教) 二六七〜二六八頁)
- (29) たとえば、笹山晴生氏(『東人』と東北経営)〔新版古代
日本8 関東〕三四七頁)が、「当時(八世紀末から九世
紀にかけて)の東国においては、郡司や有力農民の手によ
る開発が進行し、生産力が向上し、人口も増加しつつあっ
たと考えられる。革新の気にあふれた当時の仏教界は、こ
のような状況にある東国に、新たな発展の基盤を求めたの
であろう。」と指摘されているように、このころの東国の
人口増加は、教団が民衆と積極的に関わりを持っていった
- (30) ことと深い関係があったのではなからうか。
- (31) 「叡山大師伝」(『伝教大師全集』巻五付録 七頁)
- (32) 「新訂増補国史大系」第三卷 一二六頁
- (33) 「続日本後記」巻八(『新訂増補国史大系』第三卷 八六頁)
- (34) 「日本文徳天皇」巻五(『新訂増補国史大系』第三卷 五一頁)
- (35) 写経事業を展開するために、先に述べた法慧のように写経
を積極的に援助する人々(知識集団)もかなり存在してい
たことは想像に難くない。ちなみに、蘭田香融氏(『最澄
の東国伝道について』(論集奈良仏教 第二卷 律令国家
と仏教) 二七九頁)は、「授戒・護頂をはじめ造塔・写
経等の宗教行事が東国の民衆にとつては、新しい聖なるも
のへの参加という念願を果す所謂結縁の意義を持った」と
指摘している。
- (36) 武内氏(前掲B論文)によれば、「大師が広智を知るに至
った経緯としては、弘仁五年(八一四)「沙門勝道 山水
を歴て玄珠を登く碑」撰述を懇請した前下野の医博士から
伝え聞いたケースと、弘仁六年当時最澄のもとから大師の
門に帰していた秦範から聞いたケースとの二つが考えられ
よう」としている。
- (37) 前掲「高山寺蔵『金剛頂瑜伽經』(淨院寺一切經)につい
て」〔学叢(京都国立博物館) 十四号〕
- (38) 〈キーワード〉高野雑筆集、空海、徳一、広智、道忠

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、